
序 論

グラウンドナースは、なぜ必要なのか

これまでの医療は主に、病院もしくは診療所に患者が来院して、そのなかで診療、治療が行われてきました。しかし、救急医療用ヘリコプター（ドクターヘリ）の実績から理解できますように、当然のことながら重症患者が発生したときには、医師と看護師が患者発生現場に行き、現場で救命治療を行うことによって、今までに多くの患者が救命され、予後の改善が得られています。

重症の患者を救命するためには、多くの薬剤や医療機器が使用されますが、これらの医療の提供を院内で待っているよりは、患者が発生した現場に医師と看護師が行き、重症患者の救命治療を行うほうが、救命効果が得られるのは、当然の結果です。

ドクターヘリは、交通事故発生現場、もしくは高度医療機関（救命救急センター）から20～30 km離れたへき地・離島における重症患者を救命するために導入されました。いま、都市部においてもドクターヘリは運用されていますが、一部の地域に限られています。重症患者が救命救急センターなどの医療機関に搬入されるのに1時間近くを必要とする例が増加しています。

これらの重症患者を救命するために、今、ECMOを搭載した病院ドクターカーの運営を都市部で行い、多くの市民を救命しようとする活動が始まろうとしています。ICU、CCUにおいては、医師と看護師が協力して重症患者の治療と看護を行っています。この医師と看護師のペアの組織を構成することが、医療事故のない安全なドクターカーの実現につながり、ドクターヘリと同様の医療事故のない安全なドクターカーの運営につながります。

そのために、グラウンドナースが資格化され、多くの看護師がグラウンドナースの講習会受講や資格取得するようになることを要望したいと思います。アメリカでは、フライトナースが専門職種になっています。日本でもフライトナース、グラウンドナースを看護師の専門職種にしましょう。

令和5年12月吉日

川崎医科大学名誉教授（救急医学）
日本航空医療学会監事，名誉理事長
日本病院前救急診療医学会監事，元理事長

小濱 啓次

はじめに

わが国におけるドクターカーの歴史は、緊急事態発生時に医師が消防局救急車に同乗して現場活動を行うピックアップ方式などを含めるなら、ドクターヘリより古い。同様に、看護師も同乗しての緊急事態での非公認のドクターカー活動は枚挙に尽きないと考えられる。しかし、これらは救急車同乗として取り扱われ全国各地で散発的に行われていたと考える。当時はドクターカーという用語が用いられておらず、文献を渉猟しても初期の活動は確認することが困難である。

ドクターカーという言葉が明確に使われるようになったのは、1979（昭和54）年、兵庫県立西宮病院と西宮市消防本部との共同運用で開始されたのが日本国内初とされている。それ以降、総務省レベルの試行事業であったり、都道府県レベルの事業であったり、病院レベルの活動であったり、各地で徐々に広まり、1991年に厚生労働事業の一環となって以降、大きな拡がりをみせている。

このドクターカーの意義は、端的にいうなら、病院での医療が、現地に届くことにある。そのため医療資機材・医薬品を携行して、現場から医療を展開する。ここには、医師と看護師の組み合わせが必要であることは自明の理である。逆にいうなら、この組み合わせでないとドクターカーとはいえない。

しかしながら、前述したように、ドクターヘリに搭乗する看護師をフライトナースと定義し、研修や実習が行われる資格認証制度があるのは周知の事実である。同様に、1995年の阪神・淡路大震災の教訓より発した災害派遣医療チーム（Disaster Medical Assistance Team；DMAT）においても、スタッフに看護師が位置付けられ研修・資格認証が行われている。

これらの動きに併せて、2006年に発足した日本病院前救急診療医学会は、主題をドクターカーとし、発足以来、当初の会員資格を医師・看護師に限定し、ドクターカーの活動状況などの調査研究を進めてきた。このなかで、自然発生的に、ドクターカーに同乗する看護師にも一定の研修と資格認証制度が必要であろうという合意が形成された。

ドクターカーに同乗する看護師の名称においては、フライトナースや諸外国の例を参考とし議論を進めた結果、グラウンドナースとし、本ガイドブックの編集に着手した。歴史的経緯をみるなら、最初に看護師の院外活動ともいえるグラウンドナースがありきで、このシステムの上に、フライトナースやDMATの看護師などが定義されるべきであったと考えるが、ドクターカーの多様性などから定義や調査統計事業に時間がかかったことは事実である。

2022年からの厚生労働省によるドクターカーに関する調査事業や2018年から検討を進めた全国ドクターカー協議会の具体化などあいまって、本書刊行は実現化した。

是非、すべての医療従事者がグラウンドナースを理解し支援することを、そしてグラウンドナースが発展することを祈念する。

令和5年12月吉日

グラウンドナースガイドブック編集委員会・編集委員長

奥寺 敬

編集委員会・執筆者一覧

グラウンドナースガイドブック編集委員会（五十音順，敬称略）

編集委員長：奥寺 敬

副編集委員長：山崎 早苗

委員：浅香えみ子，大山 太，小中しほり，坂田久美子，佐々 智宏，
竹原 典子，照沼 秀也，林 靖之，横堀 将司

執筆者（五十音順，敬称略）

青木 弘道 東海大学医学部附属病院高
度救命救急センター

浅香えみ子 東京医科歯科大学病院

伊井みず穂 富山大学

猪口 貞樹 東海大学

大山 太 東海大学

奥寺 敬 富山大学特別研究教授

川岸久太郎 山形大学

川口 敏典 医療法人社団いばらき会

木澤 晃代 公益社団法人日本看護協会

小池 伸享 前橋赤十字病院

小濱 啓次 日本病院前救急診療医学会

小畑 仁司 大阪医科薬科大学病院

小林 裕人 山形大学

小中しほり 大阪府済生会千里病院

今 明秀 八戸市立市民病院救命救急
センター

坂田久美子 愛知医科大学

佐々 智宏 広島大学病院高度救命救急
センター・ECU

猿谷 倫史 埼玉医科大学総合医療セン
ター高度救命救急センター

城田 智之 前橋赤十字病院高度救命救
急センター

新谷 有加 和歌山県立医科大学附属病院

竹原 典子 日本医科大学付属病院

田中 秀治 国士舘大学

谷 暢子 訪問看護ステーション

Ritawell 日本橋

照沼 秀也 医療法人社団いばらき会

波元 裕也 和歌山県立医科大学附属病院

野呂 美香 やよい在宅クリニック/や
よい訪問看護ステーション

橋本真由美 福島県立医科大学

林 靖之 大阪府済生会千里病院千里
救命救急センター

福田ひろみ 徳島赤十字病院

布施 明 日本医科大学付属病院

南田 哲平 奈良県立医科大学附属病院
高度救命救急センター

峯山 幸子 東海大学医学部付属病院

宗兼 由佳 東海大学医学部付属病院

山崎 早苗 東海大学医学部付属病院

山本 恵子 アトラ訪問看護ステーション

横堀 将司 日本医科大学付属病院

監修学会・編集協力学会

監 修：日本病院前救急診療医学会，一般社団法人日本在宅救急医学会，一般社団法人臨床教育開発
推進機構（ODPEC）

編集協力：一般社団法人 日本救急医学会（担当委員：横堀 将司）

（敬称略）一般社団法人 日本臨床救急医学会（担当委員：林 靖之）

一般社団法人 日本航空医療学会（担当委員：坂田久美子）

一般社団法人 日本遠隔医療学会（担当委員：大山 太）

一般社団法人 日本救護救急学会（担当委員：田中 秀治）